

学位請求論文審査報告要旨

2018 年 7 月 11 日

学位請求者 佐藤洋輔

論文題目 ピョートル期のヘルメス的変奏——近代再考のためのエスキス

論文審査委員 糟谷 啓介
武村 知子
坂内 徳明

1. 本論文の構成

帝政ロシアの歴史のなかで皇帝ピョートル一世が統治した時期（1682～1725）、いわゆる「ピョートル期」は、通常の歴史叙述においてはロシアの近代化の基礎を作るものとしてとらえられることが多い。本論文の目的は、そうした通常の捉え方に異を唱えるわけではないが、これまでの歴史叙述が見逃してきた面を浮き彫りにするために、「ピョートル期」にさまざまな切断面を入れ、近代化という言葉だけでは明らかにならない「ピョートル」の多様な姿を浮かび上がらせ、さらにはロシア史における「ピョートル」を題材としたイメージの変奏を展開することを目的とする。論文の構成は以下の通りである。

序論 歴史における幼年期の問題

第1章 舟遊びするピョートルとロシア近代の原像——《ペテルブルグ・パノラマ》

《ペテルブルグ・パノラマ》と新しきロシア

肖像画としての《ペテルブルグ・パノラマ》

それは成功しているのだろうか？

フランスの経験

第2章 ピョートルを奏でるアンナ——バロック的世界像の現出

アンナ期という問題

アンナ・ヨアンノヴナとその印象の来歴

ピョートルをレッテル化する

《氷の館》と《氷の結婚式》

象徴的イメージが支配する

バロックとマニエリスムのあいだ

統治機構としてのバロックの非ピョートル性

都市の骨

無自覚の創造者

第3章 ペテルブルグ・マニエリスムとユートピア的梦想——《夏の庭園》あるいは柵

ゴンザーローのとまどい
マニエリストの水脈
ピョートルのフモール
ユートピア的夢想の時代
トポスとしての庭園とその柵
ピョートル期の萃点
右と左が会うとき
明滅する世界のなかで

第4章 本にひきさかれるロシア貴族——トルストイの「幼さ」と「若さ」について

ジュリアン・ソレルとロシア貴族
ラペルーズの航海にみるロシアの立ち位置
本でできたモザイク模様
革命の火花（イースクラ）
子どもたちの目
『コサック』あるいは、カフカスという経験
均される世界
貴族と非貴族のあいだで宙づりになるロシア貴族
『桜の園』の敬愛なる本棚

第5章 ピョートルの肖像というもうひとりのピョートル

「顔」をつくるということ
偉大なる猫と行列なす鼠たち
世界史の精神（スピリット）

結語

参考文献

2. 本論文の概要

序論では、本論文の問題意識、視点、方法論が述べられる。著者は、ピョートル一世の時代がロシア史の一大変革期であり、近代化／西欧化の入口とみなされることには同意するにしても、これまで描かれてきた「ピョートル」の像はあまりにも明瞭に描かれすぎているのではないかという疑念を提示する。一見すると皇帝にふさわしくないような要素でさえ、ピョートルの偉大さを表わすエピソードとして巧みに処理され、一定の物語の配置のなかに収められてしまう。ピョートルのイメージの固定化をもくろんだ代表例が、エカテリーナ 2 世の命によって 1782 年に完成されたペテルブルグの「青銅の騎士」像である。それに対して著者が照明を当てようとするのは、「子ども＝インファンティア」としてのピョートルである。「インファンティア」とは時間軸の上での「幼さ」「若さ」を意味するのではなく、歴史に遍在する事物の初発状態、そこから来る永遠の未完成を意味する。これまで一貫性と目的性をもって語られてきた歴史は、そこに「子ども」が挿入されることで一貫性と目的性を見失う。著者が見ようとするのは、そうした視点から捉えられた「ピョートル」のイメージである。

第1章では、1716年に版画家ズーボフによって描かれた「ペテルブルグ・パノラマ」がとりあげられ、歴史と肖像との関係性が論じられる。この作品は縦76.3センチメートル、幅255センチメートル、全8枚から成る巨大な作品であり、当時のペテルブルグの姿を一望できる都市景観図——しかもかなり正確な——と定義することができる。しかし著者は、この「ペテルブルグ・パノラマ」はピョートルの肖像画として見ることも可能だという。第一には、ペテルブルグという都市の起源とその名前からはじまり、画面を内容的・物質的に構成するすべてが「ピョートル」の換喩としてとらえられるからである。第二には、画面のなかに小さくはあるが明瞭にピョートルその人と妻エカテリーナが描きこまれているからである。しかもそこでのピョートルは「舟遊びをするくつろぐ皇帝」というおよそ「大帝」らしからぬ姿で描かれている。著者は、「ペテルブルグ・パノラマ」にこのような相貌のピョートルを描きこんだことは、作品の制作意図を裏切る効果をもたらしており、その点からするとこの作品を「失敗」とみなすこともできようが、こうした齟齬を「遊び」として受け取ることによってこそ、この作品の本質がとらえられるという。さらに著者は、ほかの画家や時代のさまざまな作品と比較するとともに、ピョートルのフランス体験をそこに読み込むことによって、「ペテルブルグ・パノラマ」の固有性を明らかにしていく。

第2章では、ピョートル期の後に到来したアンナ期（1730～40年）についての考察がおこなわれる。従来のロシア史では、皇帝アンナはピョートルの改革を押しとどめた「暗愚」な君主として描かれることが多い。実際にはアンナ期とピョートル期には接続する側面も多いにもかかわらず、アンナ期がことさらに「反ピョートル」的なものに描かれる理由は、ピョートルの改革路線を支持する勢力——具体的にはピョートルの娘エリザヴェータとその周辺勢力——からのアンナに対する敵意の存在があったとする。とくにそれが際立つのは、アンナの宮廷の「ドイツ性」への視線である。ドイツ系の人物が多かったことは、それまでのロシア宮廷の特徴でもあったにもかかわらず、アンナの宮廷が「ドイツ人」によって支配されたとする言説が成立することによって、それに先立つピョートル期と後に来るエカテリーナ期の「ロシア性」が浮かび上がるという仕掛けができる。著者は、こうしたメタ歴史的な叙述をふまえて、「アンナ期＝バロック」「ピョートル期＝マニエリスム」という仮説を提示し、アンナ期の特徴を再検討していく。

第3章では、ピョートルがペテルブルグに作らせた「夏の庭園」を素材としながら、ピョートル期の属性としてのメランコリー、ユートピア、ミクロコスモスなどの概念がとりあげられる。そして、ピョートルをハドリアヌス帝、ルドルフ2世、ルードヴィヒ2世らに連なる系譜のもとにとらえることで、全体として「ペテルブルグ・マニエリスム」なる枠組みが描かれる。著者はアガンベンの議論を参照しながら、メランコリーを対象喪失の予感にともなう悲哀と定義し、ピョートルにおける「後継者アレクセイの不在」の問題はメランコリーに結びつくものであったと論じる。さらに、庭園の内部と外部を分かちつた存在に注意を向け、柵による仕切りは、一つの空間を完結させると同時に、内と外の反転の可能性をも喚起する。そのとき庭園は世界となり、世界は庭園となる。ここに見られるのは世界の遊戯性であるとともに、異界への通路である。こうした視点から著者は、いくつかの文学作品に言及しながら、「夏の庭園」の解説作業を進める。

第4章では、ピョートルが創出した「ロシア貴族」についての考察が進められる。著者は、ロシアで文学を作り出したのがロシア貴族であったという明白な事実だけでなく、ロシア貴族の世界に対峙する姿勢が常に本によって媒介されていることに注意を向ける。そのことを著者は、対

ナポレオンのモスクワ攻防戦に参加した後、連合軍の一員としてパリ入城を果たしたロシア貴族の視線に例を取って説明する。戦争の勝敗の区別を超えた自身の「辺境性」の自覚は、観念的に「ロシア」の極端性、過剰性、急進性を生み出す。「デカブリストの乱」とその後の革命運動はそうした急進性の現われである。こうしたロシア貴族の特質をよく表すのがレフ・トルストイの生涯と作品である。著者は「二人のトルストイ」という構図を設定する。ひとつは「人類のあるべき理想を模索する教導者めいた偉人的な姿」のトルストイ、世にいう「トルストイ主義」という思想内容として要約できるようなトルストイである。しかしその対極には、「世界を映す『窓』という円を構成する」「世界を純粹に見つめる存在」としてのトルストイがいる。著者はエイヘンバウムの分析を参照しながら、後者のトルストイを初期の『少年時代』『青年時代』のなかに読み込んでいく。そして、これらの作品におけるトルストイの文体が観察／回想という二重性のもとに構成されており、本の記憶がこれらの二つの次元を媒介すると論じる。著者はそこに「周囲の物たちがそのまま自身の心と交通する」「トルストイの『目』性」とでもいうべきものを見出す。さらに著者はこうしたトルストイの「目」が中期の『コサック』においては「カフカス」というトポスと交錯していくさまを描写していく。

第5章では、第1章で論じた「ペテルブルグ・パノラマ」における「ピョートルの肖像」とは対極的なものとして、ロシアの民衆版画ルボークに描かれた「ピョートルの肖像」が検討される。著者がとりあげるのは、18世紀前半に制作された「猫を埋葬する鼠たち」という版画である。ここには、櫓に載せられた死んだ猫が鼠たちの行列によって墓地まで運ばれていく情景が描かれているが、これを「ピョートルの肖像」といってよいわけは、伝統的に「猫」のモチーフがピョートルを呼びおこすイメージとして扱われていたからである。著者は、画面を構成するさまざまな要素がピョートル期と結びつくことを確認したうえで、この版画の意味について考察する。著者によれば、「ピョートル＝猫」という図式の諷刺性を指摘するだけでは、この作品の特質は逃げ去ってしまう。ルボークとは「民衆のがわからの世界理解の努力そのもの」であったのであり、だからこそそこには意味の固定性にはとらわれない遊戯性が見られるとされる。ここでいう「遊戯性」とは「絵を現実として見る」ような「世界に対する直接の対峙」から生まれるとする。こうした視点から著者はルボークのなかに、第1章で論じたような「インファンティア」の痕跡を読み取ろうとする。

結論では、ピョートルと「ルネサンス」の結びつきが示唆されて、本論文全体がまとめられる。著者によれば、「イタリア」を発見したスタンダールや「ルネサンス」を発見したミシュレが直面したのは「タブラ・ラサの放心のなか、自分たちの手で、あらたなかたちをもって自己形成に乗りださなければならないという運命」であった。そうであるとする、まさにピョートル期はフランスに先立って類似の運命に立ち向かっていたともいえる。つまり、この点だけからしても、ピョートル期を単純な近代化＝西欧化とみなすことはできない。著者は、フランスを追いかけたロシアが束の間にせよフランスを追いぬく一瞬があったのだとして、ピョートル期のなかに西欧とは異なる意味での「ルネサンス」を見出すことの意味を強調して本論の結語とする。

3 本論文の成果と課題

ロシア史においてピョートル大帝が果たした歴史・文化的役割をどのように考えるか、彼の改

革とその時代をいかに理解するかという問いは、彼の同時代以降、現代まで一貫して執拗に繰り返されてきた、ロシア研究の上でもっとも基本的な問題の一つである。この問題への回答は、ピョートル「改革」に始まるとされてきたロシア近代の特徴と構造、その変遷、後世における影響と方向性を物語る点で、研究者が決して避けて通ることができない超領域的イシューであるため、研究史は限りなく広大である。

本論文は、上記の問題に対して試みられた著者による渾身の挑戦である。改めて述べるまでもなく、論文テーマは、ロシアの近代化を主導したピョートル大帝像ならびにピョートル期の文化について再考し、新たなアプローチの方向を模索・提示することにあるが、この点に関して言えば、本論文が提起する問題群の全体が膨大であることに加えて、個別の論述にいくらか問題点が見出せるとはいうものの、論文の意図は全体として成功していると考えられる。この点が本論文の第一の意義である。

著者はピョートル像に関連する膨大な研究成果の中、かなり多くの文献を参照しているにもかかわらず、それらをいわゆるアカデミズムの枠内に収めようとはしない。強いて言えば、ピョートル期の改革事業を建築、ヴィジュアル、ヴァーバルの面から「文化革命」として捉える一連の仕事を残してきた J.クラクラフトによる一連の研究の方向に近いかもしれないが、それにとどまることもない。論文で取り上げられた具体的事象は、パノラマ図、花火と祝典、庭園、民衆版画、少々時代が下って 19 世紀後半を中心とした本をめぐる貴族の経験、といったように「雑多」なことから、自ずと既製アカデミズムのジャンル区分からはみ出さざるをえないのである。後に指摘するような難点が見られるとはいえ、著者の執拗なテーマ追求とその主張には説得力がある。

論文の第二の意義は、ロシア文化史におけるアンナ期（皇帝在位 1730～1740 年）が持つ重要性が確認できた点である（第 2 章）。ピョートル亡き「空白の」ロシアを、自らの意志によることなく「継承」したのは、政略結婚でクールラント公に嫁ぐが、ただちに未亡人となってバルトの地に蟄居させられていたピョートルの姪アンナだった。彼女の政治家としての「無能力ぶり」については、彼女の側近で寵臣の「悪名高い」E.I.ピロンとともに、革命前ロシアだけでなく、ソビエト・ソ連崩壊後のロシアにおける「正統的な歴史」でほぼ定説化してきた（その筆頭は、アンナ期を「ロシア史の陰鬱な一ページ」とし、彼女を「ロシア史の暗い斑点」とした革命前ロシア最大の歴史家 V.O.クリュチェフスキイの記述である）。しかし、ピョートル後のロシア社会の近代化が持つダイナミズムという観点に立って、アンナ期に生じた多くの文化現象（宮廷道化、遊戯、娯楽、式典と花火、ページェント《氷の館》等）を再考するならば、アンナ期の文化史上の重要性が明確に浮かび上がるはずである。これに関して著者は、ピョートル期の文化を継承しながらも、アンナ期の文化が新たなバロック的（演劇的）空間を誕生させたと結論づけるが、この点は、近年のロシアにおけるこの分野（演劇史・祝祭史・民衆文化史等）の興味深い成果とも呼応し、多くの独創性を示している。論文全体を通じて言えることだが、著者は西欧の文化史に通じており、西欧のバロックならびにマニエリスムの文脈の延長で 18 世紀以降の近代ロシア文化を捉えなおそうとする方法を取るが、それは本論文第 2 章で大きな効果を生んでいる。この点は、本国ロシアでは限定的にのみ認められ、特に、マニエリスムについては、ソビエト、ロシアでほぼ完璧に「拒否」されてきたことを考慮すれば、本論文の試みは今後のロシア文化史研究の進展にとって貴重な糸口となると考えられる。

論文の第三の意義は、序論でその方向性が述べられている《子ども》の視点の導入である。もっとも、子ども文化に対しては革命前の時代から多くの関心が向けられ、広義の教育学に関連する分野で多くの成果が生まれてきた。また、ピョートルの言動を「野生的」「子どもっぽさ」としてエピソード的に指摘する試みもあった。しかし、著者は、本論文の序論で述べるように、G.アガンベンの論考に多く依拠しながらも、子どもの目（その視線の高さと方向性）からロシアの歴史と文化を捉えようとする。それは子どもの描かれ方への着目ではなく、子ども性によるロシア文化ならびに「近代」の再考であり、《子ども》によるロシア文化史の再構築である。その論述は意欲的でユニークな方向を提示しており、ピョートル、アンナ、そしてレフ・トルストイ「自伝」他に通底する《子ども》の視線に注目する筆者の論述は魅力的である。

本論文の意義の第四は、「本にひきさかれるロシア貴族」と題された第4章の構想と論述の巧みさにある。全体として、この章の説得性は大きく、完成度は高い。もっとも、この章のテーマが、それ以前の章の論述の流れとはいささか異なっていて、その意味で唐突な印象を与えるかもしれない。加えて、扱われる時期もピョートル期とその後ではなく、19世紀半ばから20世紀初頭の時期なのでなおさらである。しかし、そうした違和感を超えるだけの喚起力がこの第4章には見出される。スタンダール『赤と黒』におけるジュリアン・ソレルの本への注目、亡命ロシア貴族と本の関わりに始まり、トルストイ作品に見るエンブレム・ブック、子ども時代における本「経験」の描写、そしてチューホフ『桜の園』の本棚に関する台詞への注目——そのどれもが、ピョートル像再考とは別次元のものと見えるかもしれない。しかしながら、貴族のアトリビュート（あるいは人格）たる本によってロシア近代を繋ごうとする筆者の企みは、まさに18世紀初頭のピョートル期における近代的書物の時代の幕開けから、20世紀初頭の本の時代の「終焉」へと「一気に駆け抜けた」近代ロシアの在り様そのものを鮮やかに提示したものとして高く評価したい。

その一方で、本論文には、いくつかの問題点もある。

第一は、事象の具体的把握が不足している点である。これは事例が欠けているということではなく、記述の具体性が不十分であるという意味である。例えば、第1章のパノラマ図において小さく彫りこまれているごく小さなピョートル「肖像画」の表情（論文中では「親しげな様子でくつろいでいる」とのみ記される）のさらなる描写が欲しいし、第2章での「アンナ性」「ドイツ性」はより緻密な記述が必要である。特に、後者の「ドイツ性」については、アンナ→エリザヴェータ→エカテリーナ二世という権力移動の図式との関係で見れば、アンナならびにピロンの「ドイツ性」が、あくまでバルト系ドイツであることに深く留意しなければ議論の核心には及ばないはずである。

第二に、これまでの研究文献の検討の上で、いくらか不十分さが見られたことである。筆者は、ロシア本国の多くの実証研究、特に基本文献を的確に選択・参照し、それらの多くに依拠しながらも、時に批判的な検証を試みている。例えば、第1章では、ズーボフ作の「ペテルブルク・パノラマ」を美術史・都市図像研究の総力を挙げて分析したG.N.コメロヴァ(1977)の仕事、第5章では、ルボーク作品細部を考証し、意味づけたD.A.ロヴィンスキイ(1881-1893)ならびに坂内(1991、2006)の論考のいずれも参照されている。しかし、それらの主張の核心部分を正確に引用し、場合によっては、それぞれの論考が拠って立つ基本的視点（深層）あるいは方法論に論及してもよかった。そのことによって、これまでの研究史との差別化も行われ、筆者の視点がより

明確に提示できたはずである。

第三の問題点は、西欧の文化史に詳しい筆者ゆえに、多くの貴重な着想が見られる反面、時として、論述の話題とテーマがヨーロッパに傾斜し、個所によっては、概論風の流れが生まれたことである。著者の観念の移動と「ゆれ」は独創的であるがゆえに、時に、強引さも見られ、連想・連鎖が飛躍することがある。ヨーロッパ文化史をめぐる多数の文献の参照は評価できるものの、それらと論文のメイン・ストリームとの整合性が見えにくくなることが時に見られる。その意味で言えば、ロシアに踏みとどまって、より展開してよい部分がある一方で、類似事象をめぐり、西欧とロシアとをより正面から「衝突」させてよい個所がいくつか見受けられた（たとえば、「マニエリスム」概念に関する議論）。この点は、今後の大きな課題となるはずである。

以上に例示した問題点が見られるとはいえ、本論文には、多くの新たな切り口・着想に基づく貴重な論点が多数提示されており、ロシアならびに日本のロシア文化史研究にとって斬新な方向性をうかがわせるものとして高く評価できる。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終試験結果の要旨

2018 年 6 月 13 日

学位請求者 佐藤 洋輔
論文題目 ピョートル期のヘルメス的変奏——近代再考のためのエスキス
論文審査委員 糟谷啓介 武村知子 坂内徳明

2017 年 10 月 30 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 佐藤洋輔氏 の博士学位請求論文「ピョートル期のヘルメス的変奏——近代再考のためのエスキス」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、佐藤洋輔氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を佐藤洋輔氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。